

解説編

「すべての子どもが学びやすい環境づくり」振り返りシート（試案）～「授業のユニバーサルデザイン化」の視点をふまえて～

・配慮を要する子には「必要な支援」で、どの子にも「有効な支援」を少しでも増やすこと！

授業の枠組み	1	子どもの特性を理解した授業づくりをしている（発達障害の特性や支援方法の理解も含めて） ◆発達障害の特性や支援方法の理解とともに、発達障害の有無にかかわらず、いろいろな特性のある子どもがいることを認識し、それぞれの子どもに応じた支援方法を見つけましょう。 「子ども理解」が出発点です。
	2	授業の開始と終了の時間を必ず守っている ◆予定通りでない不安になる子は、予定通りにいかないことがストレスになり、パニックにつながるケースもあります。また、時間にルーズな子には、教師がよいモデルとなり、時間に正確な生活を経験させることが大切です。
	3	「授業のルール」を明示し、年度当初や節目に確認している（返事や発言の仕方・聞く姿勢等） ◆耳からの情報が入りにくい子は、掲示するなど視覚的に示すことで伝わりやすくなります。「きまり」にルーズな子も、掲示により意識しやすくなります。また、年度当初や節目に「ルール」を必ず確認するなど、子どもに伝わるように徹底することが定着につながります。 授業中ざわざわすると不安定になる子がいます。私語がなくなれば、その子もみんなも気持ちよく授業ができます。なぜそのルールが必要なのかをきちんと教えることも大切な支援です。
	4	授業の流れにめりはりをつけ、集中力が途切れないようにしている ◆集中が持続しない子や授業以外のことに注意が向きやすい子が1時間の授業に集中できるように、授業の流れ・提示する資料・提示方法などを工夫する必要があります。問題や課題に取り組む時間を十分に確保することも、意欲や主体性を引き出す大切な支援になります。
教室環境	5	机や備品が整然と並び、掲示物が整然と掲示されている ◆様々な刺激に敏感に反応してしまう子にとって、5S（整理・整頓・整然・清掃・清潔）は落ち着いて学習するために必要な支援です。 (例) 机の位置は、授業の開始時に整えることで意識させる。下校後は教師が整えておく。 ロッカーや机のフックの使い方、机の引き出しの整理は、事前に示し日常的に指導する。
	6	黒板まわりに余計な掲示物がなく、すっきりしている ◆様々な刺激に敏感に反応してしまう子も、ひとつのものにこだわると離れられない子も、黒板は授業中に最も注目させたい場所です。黒板まわりの刺激を少なくし、集中しやすくすることが必要です。 (例) 掲示物は、黒板から少し離すか、教室の側面に掲示する。 掲示物を他に移せない場合は、白布やカーテンで隠す。
	7	子どもに必要な情報がわかりやすく提示されている（日課表・当番表・授業のルール 等） ◆見通しが持ちにくい子・意味理解が苦手な子に必要な支援です。学年に応じた見やすくわかりやすい提示方法を工夫してみてください。 (例) 期日が過ぎたり、必要がなくなったりした掲示物は外す。必要のないものは掲示しない。 教科や数字などよく使うものは文字カードで見やすくし、活動場所も明示する。
	8	教室が子どもにとって、静かな環境になっている ◆聴覚過敏な子どもにとっては、水槽のモーター音やカーテンが風に揺れる音なども気になってしまいます。教室の音に対しても気を配り、授業に集中しやすくすることが必要です。
	9	子どもの作品を大切に扱い、丁寧に展示してある ◆子どもは自分が大切にされていることが実感でき、保護者にはわが子が学校で大切にされていることが伝わります。 (例) 台紙に貼ったり、ケースに入れたりして、作品を直接画鋏でとめるようなことはしない。 机上に飾るものは、布を敷いて飾るなど、見栄えのする展示を工夫する。 全員の作品にコメントを書くなどして、よさがさらに引き立つようにする。

学習環境	10	黒板に前時の消し残しがなく、きれいになっている ◆休み時間からの気持ちの切り替えが難しい子・消し残しにより黒板の字が読みにくくなる子や集中できなくなる子に必要な支援です。黒板をきれいにすることは、切り替え・見やすさ・集中力等に困難を抱える子に有効な支援となります。 (例)黒板は、仕上げ拭きをして、きれいに消しておく。 気持ちの切り替えには、チャイム着席・あいさつ・テンポのよい導入等も大切な支援です。
	11	授業のはじめに、机の上に必要な物がそろい、不要な物が置いてないか確認している ◆机を整えることが苦手な子は、必要な物がないまま授業を受けていたり、指摘されてから準備したりするために学習に集中できません。机の上のどこに何を置くといった丁寧な指示により机が整うと、姿勢もよくなり、集中力も高まります。はじめのうちは細かく丁寧に指示をして、定着してきたら指示を減らしていくことも大切になります。 (例)授業に必要な物を板書したり、机上の配置を図示したりする。
	12	「授業の流れ」や「活動の手順とゴール」を示し、見通しがもてるようにしている ◆見通しがもてないと不安になる子、活動の手順やゴールがわからないと進めていけない子に必要な支援です。中には、予定の変更やいつもと違うスケジュールの時にパニックになる子もいます。見通しをもてるように、活動のゴールを示すことが大切になります。 (例)授業の流れを固定化する。 授業の流れ、活動の手順とゴールなどを、黒板に明示する。 ペア学習や班別活動では、話し合いのルールや手順・ゴールを明示しておく。
	13	座席決めや班編成は、子どもの特性に応じた配慮をしている ◆集中が持続しない子・立ち歩きのある子・友だちの援助で動ける子・教師のきめ細かい支援が必要な子は、座席配置や班編成で配慮することにより学びやすくなります。 (例)集中が持続しない子や立ち歩きのある子は、刺激の少ない前方中央付近の座席にする。 聞き逃しのある子や授業の流れに乗れない子は、隣に頼りになる子を配置する。 気になる子は教師の目の届きやすい席にする。

伝え方	14	声の大きさやトーンを、伝える内容によって変えている ◆聴覚過敏で大きな音が苦手な子・聞き逃しがある子に必要な支援です。聴覚過敏がある子は、大きな声や音、ざわざわした環境がとても苦手な大きなストレスになります。聞き逃しがある子は、注意を向けてから落ち着いた雰囲気の中で伝えることが必要です。 (例)じっくり聴かせたい時と、テキパキと進めたい時では、声の大きさやトーンを変える。
	15	指示は、子どもの注意を向けてから、わかりやすい言葉で、はっきり短く伝えている ◆聞き逃しのある子・集中が持続しない子に必要な支援です。1回の指示で伝わるように、伝え方を工夫することが大切です。視覚支援を組み合わせるとさらに効果的になります。また、「だいたい〜」「〜くらい」「しっかり」「きちんと」などあいまいな言い方や長い説明はわかりにくいので、具体的かつ簡潔に伝えることが大切です。 (例)「大事なことを言います」「〜について3つ言います」と注意を向け、数を示してから話す。 指示は1回に1つとし、複数指示する場合は、掲示や板書など視覚支援で補う。
	16	大事なことは板書等で示している(ページ・学習課題・活動の手順とゴール 等) ◆記憶が苦手な子や聞き逃しのある子が、安心して学習に取り組むために必要な支援です。忘れたり、わからなくなったりしても、黒板を見て再確認できるので、キョロキョロすることも少なくなります。 (例)「学習課題」「ポイント」「まとめ」などと書いたマグネットシートを準備しておくとう便利です。
	17	視覚的な提示を工夫している(実物・写真・ビデオ・図・絵カード・文字カード・表情・動作・指差し 等) ◆耳からの情報が入りにくく、目からの情報に頼っている子にとっては、視覚支援は欠かせません。人は約8割の情報を視覚から得ているといわれており、視覚支援の工夫は多くの子どもにとってわかりやすい授業につながります。 (例)写真やビデオには不要な情報も入っているので、どこに注目するか予め伝えておく。 喜怒哀楽・音や声の大きさ・善悪など、目に見えないものを視覚化・数値化して提示する。

板書	18	簡単な板書計画を作り、1時間の板書が黒板に収まるようにしている ◆書くことが苦手な子・見て写すことが苦手な子に必要な支援です。黒板1枚に板書がまとまっていると、授業途中で黒板が消されることがないので、安心してノートに写せます。 (例)小1は、国語ノートと同じマス目黒板を活用するとノートに写しやすい。 黒板を3分割し、導入「学習問題」・展開「練習問題」・終末「まとめ」に分けるなど工夫。
	19	字の大きさ、色チョークやアンダーライン・囲み等で、見やすさを意識している ◆見て写すことが苦手な子・目の動きや焦点合わせが苦手な子で文字が見えにくい子に必要な支援です。シンプルに要点がまとめてあると、視覚的にわかりやすくなります。 (例)白を基本、重要用語は黄、重要な箇所は赤の下線など決まり事があると写しやすい。 青など見えにくい色のチョークの使用や色チョークの多用は避ける。
	20	ノートに写す時間を確保するなど、子どもの動きを見ながら授業を進めている ◆書くことが苦手な子・見て写すことが苦手な子・視覚機能の課題により文字が見えにくい子・一度に2つのことをするのが苦手な子には、ノートを写す時間の確保と焦らせず諦めさせない配慮が必要です。 (例)板書を写す時間を確保するのか、聞きながら写すのか、事前に明確に伝えておく。 極端に写すことが苦手な子には、教科により板書計画のコピーを渡すことも検討する。
	21	残しておきたい内容は模造紙に書くなど、次時を見通した工夫をしている ◆学習の定着に課題がある子・前時からのつながりを理解しにくい子にとっては、前時の学習内容を振り返る機会があると、理解が深まり、学習の定着につながります。 (例)模造紙による「消えない板書」の活用、学習カードや模造紙・画用紙を使った学習まとめなど、ノートや黒板以外のものを組み合わせて学習の成果につなげる。

関係づくり	22	笑顔で子どもと接し、日々の対話を大切にしている ◆課題を抱えている子は、その子自身が困っており、教師の肯定的で温かい支えが不可欠です。共に喜び悲しんでくれる先生、困った時には助けてくれる先生の存在が、何よりも心強い支えとなります。 (例)朝、顔を合わせたら、「おはよう」のあとに「今日もいい顔してるね」などと一言加える。 休み時間や放課後の何気ない会話を大切に、子どもとの距離を縮める。
	23	子どもを日頃から肯定的にとらえ、「責める」「否定する」「人と比べる」ことはしない ◆エネルギーが低下している子は、周囲の言動に過敏になり否定的に受け止めてしまうことがあります。中には、心の傷として忘れられなくなる子もいます。子どもとの関係を一瞬で崩壊させないために、言動には十分気をつける必要があります。「寄り添う」「肯定する」「その子自身の変化や成長に目を向ける」ことを通して、子どもとのよりよい人間関係を築きましょう。
	24	「ありがとう」「助かったよ」と感謝の気持ちを伝えている ◆自尊感情が低下している子にとって、危機的状況から脱するきっかけにつながる支援となります。自分が「人の役に立っている」と実感できることは、ほめられること以上にうれしいことです。
	25	「認め合い」「支え合い」を大切にした学級づくりをしている ◆友だちとの関係づくりが苦手な子・不器用で体や指先の使い方が苦手な子にとって、学級全体に支え合いや困った時に助け合える雰囲気があると、トラブルや失敗を乗り越える原動力になります。

意 欲	26	子どものわずかな成長や努力を、見逃さず認めるようにしている ◆「どうせ自分なんて」と投げやりになりかけている子には、「先生はわかってくれている」という絶対的な安心感が必要です。周囲と比べることなく、その子に目を向けて認めていくことが大切です。
	27	子どもの発言やつぶやきを肯定的に受けとめ、授業の中で生かしている ◆子どもとともに授業を創ることにより、主体性や意欲を引き出したいものです。発言をあまりしない子は、つぶやきを取り上げたり、ペア学習や班別活動を取り入れたりするなどして活躍の場面をつくることで、学習意欲が高まるように支援しましょう。 また、指名される前から一方的に発言を繰り返す傾向のある子には、指名されてから発言するといった「授業のルール」を定着させることが必要です。おおらかに対応しながらも、ルールが守れた時には大きな賞賛を与え、ルールの定着を図りましょう。
	28	間違えたりうまくいかなかったりする時も、よさや意欲を認めるようにしている ◆間違いや失敗に過敏になっている子は、不安とストレスを抱えています。間違いを責めたり指摘したりすることは禁物です。「間違えても大丈夫」「間違えたことにより学習が深まってよかった」という雰囲気の中で、安心して力が発揮できるようにしたいものです。
	29	解答が難しそうな子どもには、ヒントを与えたり選択肢を設けたりしている ◆学習に自信がない子は、授業の中で声がけをすることや、小さな「できた」「わかった」から積み上げていくことが必要です。子どもが自分で選択できる難易度の違う学習プリントを複数準備することも有効です。

評 価	30	よい姿は、すぐにほめたり、授業の中で取り上げたりしている ◆叱られることの多い子や自尊感情が低下している子は、ほめる機会を逃さないようにします。人前でほめられることが効果的な子、こっそりほめてほしい子、具体的に伝えないとほめられたことが実感できない子など様々です。その子に応じた「ほめ方」を見つけましょう。 一方で、悪いことは「きちんと叱る」ことが必要です。日常的にほめることにより、叱るべき時に響きやすくなります。静かに本気で叱ることと具体的に伝えることが大切です。
	31	授業や単元の終わりには、よさを認め合う場面を設けている ◆自分のよさや友だちのよさに目が向きにくい子にとって、お互いのよさを認め合う機会をつくることは、自信の高まりとともに、友だちとの良好な人間関係づくりにつながる大切な支援です。
	32	自己評価ができるように工夫している（授業の終末・単元の終わり・学期末・年度末） ◆自尊感情が低下している子には、肯定的な自己評価につながる機会を設けることが必要です。また、自己を振り返り、肯定的に自己理解を深めることは、進路や将来を考える上で欠かすことができないことです。 (例) 学習プリントは綴じ込みまで指導し、ファイルの厚さで努力が実感できるようにする。 自己評価票で自分の良さや努力を振り返ることにより、肯定的な自己評価につなげる。
	33	評価を本人と保護者にわかりやすく伝えている（具体例・実物・作品・写真 等） ◆自信が持てない子には、良さや努力している点について具体的に示すことで、自信の回復につなげる必要があります。また、保護者に子どものよさや成長を具体的に伝えて評価を共有することは、連携する上で欠かすことのできない基盤となります。